

富士山における落石と登山者事故の特徴 The characteristics of rockfall and accident on Mount Fuji

小森 次郎^{1*}
KOMORI, Jiro^{1*}

¹ 帝京平成大学
¹Teikyo Heisei University

山岳から丘陵域で発生する斜面移動現象の中でも、落石は日常的な現象である。特に活動的な火山地域では噴火静穏期であっても、小規模な斜面崩壊を含むこれらの現象は珍しいものではない。それでも、道路や居住地周辺の斜面对策が多くて施されている日本の場合、落石と言う現象は滅多に遭遇しない現象である。しかしその一方で、余暇としての観光や登山が発達したこの国では、落石を知らない人が山岳域へ立ち入るため、実は落石のリスクは高いとも考えられる。

日本の山岳観光地や登山道の中で、過去34年間で落石事故が最も多いのは白馬大雪渓、次に富士山である。また、記録に残るものとして最も大きな被害となった落石事故は、12名の死者を出した1980年8月の富士山吉田大沢での事象である。事故のあった登山ルートはその後閉鎖されたが、他のルートでは毎年のように落石死傷事故が発生している。しかも、富士山の登山者数は過去7年間で毎年30万人を前後しており、世界遺産に登録されたこともあり年齢も国籍も多様化している。そこで、富士山の落石事故の事例と発生危険箇所について調べてみた。本発表では、4つの登山ルートにおける落石危険箇所とその地質的要因、および対策案について報告する。概要は以下の通りである。

- 吉田・須走ルート、富士宮ルート、御殿場ルートいずれも、主な落石事故は八合目と山頂の間で発生している。
- 落石事故は登山者が集中する7月中旬から8月に集中して発生している。
- 1日のなかでの落石事故の発生時間帯に偏りは見られない。
- 人為落石（他の登山者によって発生した落石）は下山者、特に一般ルートから外れた登山者から発生することが多い。
- 自然落石は落石は溶岩またはアグルチネートの塊状部分が主な発生源となる。特に富士宮側の山頂直下の岩盤には多数の開口亀裂があるが、その下には登山道が続いている。安全のためにはルートの付け替えも検討が必要であろう。

キーワード: 登山, 山岳観光, アグルチネート, 人為落石, 噴火静穏期, 事例研究

Keywords: mountaineering, mountain tourism, agglutinate, human-induced rockfall, quiet interval, case study